

Title	旧約聖書における「顔」の比喻：人格概念の一源泉
Sub Title	The metaphor of "Face" in the Old Testament : an origin of the concept of personality
Author	内田, 満(Uchida, Mitsuru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1981
Jtitle	哲學 No.73 (1981. 12) ,p.25- 47
JaLC DOI	
Abstract	It is very often said that the word "personality" is derived from Latin "persona" meaning "mask" put on by the actor at the ancient Roman theater. And most ethical theories have so far interpreted personality in this way. I should like to assert in this paper that the word "personality" originates in Hebrew "panim" (face) in the Old Testament. Ancient Hebrews did not know the philosophical concepts which ancient Greeks were very familiar with. In order to denote God, the Hebrew writers of the Old Testament used personified expression including the metaphor "the face of God." It means the presence of God; in other words, God's participation in Israel's history. Several phrases had been made in order to express either God's grace toward Israel or His judgment against Israel. They are also metaphorical expressions of the personal relations between God and man. Those usages of "face" were succeeded by the Greek New Testament through the medium of the Septuagint which is the translation of the Old Testament from Hebrew into Greek. What is more, Martin Buber's personalistic interpretation of the Old Testament is one of modern philosophies emphasizing the meaning of the word "personality."
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000073-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

旧約聖書における「顔」の比喩

——人格概念の源泉——

内 田 満*

The Metaphor of “Face” in the Old Testament

——An Origin of the Concept of Personality——

Mitsuru Uchida

It is very often said that the word “personality” is derived from Latin “persona” meaning “mask” put on by the actor at the ancient Roman theater. And most ethical theories have so far interpreted personality in this way.

I should like to assert in this paper that the word “personality” originates in Hebrew “pānīm” (face) in the Old Testament. Ancient Hebrews did not know the philosophical concepts which ancient Greeks were very familiar with. In order to denote God, the Hebrew writers of the Old Testament used personified expression including the metaphor “the face of God.” It means the presence of God; in other words, God’s participation in Israel’s history. Several phrases had been made in order to express either God’s grace toward Israel or His judgment against Israel. They are also metaphorical expressions of the personal relations between God and man. Those usages of “face” were succeeded by the Greek New Testament through the medium of the Septuagint which is the translation of the Old Testament from Hebrew into Greek.

What is more, Martin Buber’s personalistic interpretation of the Old Testament is one of modern philosophies emphasizing the meaning of the word “personality.”

* 慶應義塾大学大学院文学研究科哲学専攻（倫理学分野）博士課程

聖書からの引用は、特に断りのないかぎり私訳である。できるだけ直訳して原意を明確にすることを心掛けたので、日本語として坐りの悪くなった訳もある。聖書からの引用箇所を明示する場合、書名の最初の一字か二字をもって略号とする。たとえば「創世記」は「創」、「マタイによる福音書」は「マタ」というように。「3:2」は「3章2節」を表す。章と節の番号は下記のテキストに従う。日本聖書協会訳聖書の番号が多少ずれていることがあるが、いちいちそれをことわらなかった。旧約聖書の原文・原語を引用する場合、ヘブル文字をローマ字に音写する方式はサンスクリットなどとは異なり一定していないので、この小論ではアルファベットを“’ , bh(b), gh(g), dh(d), h, w, z, ḥ, ṭ, y, kh(k), l, m, n, s, ‘, ph(p), ṣ, q, r, ś·š, th(t)”と表記する。()内は弱ダゲシュの付く場合、強ダゲシュの付くときはその子音を繰り返す(たとえば bb)。有音シュワは l’ のように子音の右上に点を付す。母音については、子音を伴った最長母音は ê, 普通の長母音は ē, 子音を伴った短母音は ě, 普通の短母音は e のように表記する。旧約聖書のテキストは R. Kittel, ed., *Biblia Hebraica*, Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart, 1937, 1973 を、新約聖書のテキストは K. Aland, ed., *The Greek New Testament*, United Bible Societies, West Germany, 1966, 1975 を用いた。

序

「人格」という語は、明治三十年頃に井上哲次郎が personality の訳語として造語してから、わが国の学問・思想界に普及しはじめ、その後、広く一般に用いられるようになった。それ以前には、明治十四年に person が「人・本身」、personality が「人品」と訳されたことはあったが、人格概念とそれが表す思想は、わが国ではまったく異質であったと言えるであろう。

“person, personality” は独語の “Person, Personalität” や仏語の “personne, personnalité” と意味の領野を等しくし、これらの語は同一の語源から発している。その語源はラテン語の persona である。このペルソナは元来、古代ローマの演劇において役者が顔につけた「仮面」を意味し、その意からその仮面をつけて演じる「役者」「登場人物」「役割」「役

柄」「人柄」「人」「法廷の権利主体たる人間」の意が派生したと言われている。⁽³⁾その後、初期キリスト教神学において、この語は父なる神のペルソナと子なるキリストのペルソナと聖霊のペルソナの三位一体を表すために採用された⁽⁴⁾(わが国では三位一体論においてペルソナは「位格」と訳され、人間の「人格」と区別される)。さらに、三位一体論の形成途上において、神のペルソナの語源を可視的な「仮面」に求めることは神の不可視性に抵触するという理由から、ペルソナの語源を「仮面」とは別に“per se una”(それ自体によって一つであること、おのれ自身によって一であるもの)と解釈する一種の語呂合せが行われた。⁽⁵⁾しかし語呂合せとはいえ、この解釈はペルソナのもつ自己同一性や具体的個性をよく表していると考えられ、哲学・倫理学的な人格観にも影響を与えた。その人格観を図式化すれば、「役割」の意から、人格を社会的存在、他者と関わる「共同存在」と考える人格観と、「自己同一性」「具体的個性」の意から、人格を他者から独立した主体と考える人格観の両極に弁別できる。哲学・倫理学史上、さまざまな人格解釈がこの二つの人格観のあいだを揺れ動き、そのどちらかに片寄るか、あるいは融合が試みられて、かずかずの人格論が展開されていった。

ローマ演劇がギリシア演劇から受け継いだ「仮面」を、ペルソナが意味するという点で、「人格」という語の遠い始源はヘレニズムにあると言ってよいかもしれない。⁽⁶⁾さらに、キリスト教神学が採用した「位格」は、ペルソナがヘブライズムの流れをも吸んでいることを表している、と短絡的に考えられないこともない。しかし注意すべき点は、厳密に言えば、三位一体論は聖書にない神学思想であり、⁽⁷⁾ヘブライズムに根ざしているとはいえないことである。にもかかわらず、現代語の「人格」には三位一体論とはまったく異なるヘブライズム的な重要な意味が生きている、と私は主張したい。倫理学においては、通常、「人格」の語源はラテン語ペルソナに求められる。もちろんそうした見解は語源学的に正しいのであるが、現代語

の「人格」の意味領域にはもう一つの輩流が流れ込んでいることに注意したい。その流れは決して細流ではない。それは旧約聖書から滔々と流れ来たる奔流である。この小論の目的は、これまで倫理学界において無視されてきたが、しかし「人格」という語のなかに生きている、旧約聖書を源流とする意味内容とそれを表す語法を明らかにすることである。

I

旧約聖書において、神についての叙述はきわめて擬人的である。神は父、王、主、あるいはいくさ人と呼ばれ、また神が肉体をもっているかのように、神の手、腕、足、顔、眼、鼻、口、唇、耳、あるいは後姿という表現が旧約聖書に満ち溢れている。同様に、神が悔恨、怒り、苦しみという人間のもつ感情をもっているかのような神人同感的表現も著しい。こうした特徴から、古代イスラエルの宗教が原始的で素朴であったと考えられることがある。事実、長いあいだに渡って書き継がれた旧約聖書の最初期の資料に、最も明白な擬人法の多くが見出され、神学的思考が目醒めたのちの時代にはそれが少なくなっていった。しかし、擬人的表現は完全に払拭されることはなく、旧約聖書の特徴として残った。旧約聖書の擬人法に注意すると、神の身体を具体的に統一のある形象として表象できる頭や胴体についての描写が欠けており、神の容貌についての具体的な描写もまったくないことがわかる。こうしたことから、神についての擬人的な叙述を文字通りにとることは問題であり、神についての詩的表現として比喩的に理解しなければならない、と考えられる。たとえば、神の右手は力の比喩であり、鼻は怒りを意味する⁽⁸⁾。比喩的に解釈すべき理由は、神の像を徹底的に放棄せよとの禁令⁽⁹⁾を考慮するとき、より明らかになる。偶像禁止は旧約聖書の全時代を通じて守られたわけではなかったが、イスラエルの宗教の堅持すべき中心的な戒めの一つとして主張されつづけた。この禁令は神を模写すべきでないという戒めであると同時に、神を像として描きえない

こと、つまり神の超越性の表現でもある。神の超越性こそイスラエルの神観の根幹をなしており、偶像禁止はイスラエルの神認識の本質を表現している。しかし他方、神について語る場合、イスラエルは人間的な表象を用いざるをえなかった。なぜなら、イスラエルは神の超越性を主張すると同時に、神と人間が関わり、交わりをもつことをも表現しなければならなかったからである。擬人法こそ、イスラエルの人格的神信仰を担っているのである。

旧約聖書に見られるこうした多くの擬人的表象のなかで、特に神の「顔」という表現を取り上げることにする。

旧約聖書においては、「顔」を意味するヘブル語の *pānîm* が用いられている箇所は 2127 を数える。⁽¹⁰⁾ パニームの語源は明らかでないが、「向ける」を意味する動詞 *pānā* (h) と同一語源に属することは確かである。通常ヘブル語の名詞は動詞から派生したと考えられ、パニームはパナーに由来し「向けられた側面」を意味するという説がある。パニームの特徴を言い当てた穿った説であるが、この説には問題がある。他のセム語族の言語には、相応する動詞がないにもかかわらず、名詞が使われることがあるからである。多くの学者は動詞パナーが名詞 *pāne* (h) の派生語だと考えている。⁽¹¹⁾ パネはパニームの単数形であるが、「顔」は常に複数形で表記され単数形は使われない。このことは人の容貌が重視されていたことを示すと考えられている。⁽¹²⁾

パニームには文字通りの意味と比喩的な意味がある。文字通りの意味として、(一)動物の「顔」⁽¹³⁾、(二)仮空の動物ケルビムやセラピムの「顔」⁽¹⁴⁾、(三)人の「顔」を表す。旧約聖書にはさまざまな表情をした人の顔が描写されている。恥知らず、傲慢、粗暴、冷酷、獰猛といった人の性質を表す表情が描かれ、⁽¹⁵⁾ 顔の色や表情の変化が、屈辱感、恐怖、不安、苦痛、悩み、苦しみそして喜びといった感情を表している。⁽¹⁶⁾ さらにパニームには (四)「表面」とか「前面」の意がある。この用法は比喩的用法と考えられないこともない

が、旧約聖書においては詩的力をもたずに、大地、水、満月などの自然物の「表面」や、鍋、斧、剣、部屋、宮などの人工物の「表面」や「前面」を意味する⁽¹⁷⁾。また戦いの「前面」とか、物の状態をその表面や上辺で知る場合、たとえば羊の「状態」などにもこの用法が使われる⁽¹⁸⁾。

人の顔の表情についての叙述が、新約聖書に比較すれば多様で生彩に富んでいるとはいえ、パニームが文字通りの意味で使われるこうした用法は、旧約思想の特徴となっているわけではない。「顔」の比喩的用法こそ、イスラエルの思想の特質をなすのである。以下にそれを見てゆこう。

II

旧約聖書においては「神の顔」という表現が頻出する。偶像禁止が遵守すべき戒めであったことを考え合わせると、これは奇異なことである。そのため、そうした表現に祭儀的な起源があったことが想定される。たとえば「神の顔を見る」という言い廻しを取り上げてみよう。この言い廻しは民の神殿訪問の慣用句になっていた。イスラエルの神殿には神像がなかったから、この言い廻しが偶像崇拜を意味しないことは明らかである。それゆえにこの奇妙な言い廻しには異教的起源が暗示されているように思われる。偶像崇拜を行っていたカナン⁽¹⁹⁾の宗教では聖所に神像が安置されていたので、イスラエルが異教の祭儀的表現を踏襲したと推察されるのである。神がイスラエルの民に、「あなたがたは私の顔を見るために来る」(イザ1:12)が神殿の庭を踏み荒している、と言って非難する句がある。この「見るために」(lir'ôth)という能動形はのちに受動形に読むよう指定され「見られるために⇒現われるために」(lēra'ôth)と読まれるようになった⁽²⁰⁾。子音テキストに付する母音を変えるだけで、能動動詞(カル)を受動動詞(ニフアル)に変更できるのである。「神の顔を見る」という表現が偶像崇拜の禁令に抵触するので、そうした表現を避けるために、のちに「神の前に現われる」と読み変えられたと考えられる⁽²¹⁾。同様に祭儀的起源が推察

されるのは、神がモーセから離れずに荒野の彷徨を導くという箇所である。「私の顔がともに行くであろう」(出エ 33:14) という句は、神の臨在を祭儀的方法によって表現したことを示している、と考えられないことはない。この箇所を祭儀に使われた仮面の原因譚と見なす学者もいる。⁽²²⁾ しかし、こうした言い廻しの起源にまで遡及してその由来を明らかにすることは不可能である。こうした表現は、元来は祭儀に属する何物かを指示していたかもしれないが、重要なことは、それらが元来の意味から離れて比喩的な意味を獲得したことである。

「神の顔」は神の顕現様式の一つである。神の顕現様式としては、ほかに「主の使い」「栄光」「神の名」「神の霊」「自然の諸現象」が挙げられる。旧約聖書の古い資料において、神は樂園を散策し、ノアの後で箱舟の戸を閉め、天から下ってバベルの塔を見る。こうした古い擬人的表現は旧約聖書のかなり早い時期から素朴すぎると考えられ、神の顕現にふさわしい表現に改められていった。神の「顔」は擬人法の名残りを留めているが、すでに述べたように容貌についての具体的な描写が欠けており、比喩として解釈されなければならない。「私の顔がともに行くであろう」という句についてさらに考えてみよう。邦訳では「私自身と一緒に行くであろう」⁽²³⁾、仏訳では“Je marcherai moi-même avec toi”⁽²⁴⁾、七十人訳では“*Ἀὐτὸς προπορεύσομαι σου*”⁽²⁵⁾となっており、どれもパニームを「自身」と訳している。また英訳では“My presence will go with you”⁽²⁶⁾となっており、「現在」「臨在」と訳されている。これらの翻訳が表しているように、「神の顔」は比喩的な意味として神がイスラエルの民に自らを現わすこと、神自身が民とともにあることを表現している。もう一つの英訳では“I will go with you in person”⁽²⁷⁾となっており、神が「自ら・親しく・直接に」民とともに荒野を進むことが訳出されている。神の「顔」は神から分離しうる存在の一つとはみなしえず、⁽²⁸⁾神の全人格を意味していると同時に、神とイスラエルの民が人格関係をもっていることを表現している。この箇所

から「顔」の祭儀的起源を推究せずに、聖書記者が神と民の人格関係を強調するために神の「顔」という比喻を意図的に用いたと考えることもできる。⁽²⁹⁾ その場合、「神の顔」は神と民の人格関係の比喻として、旧約文学においてすでに詩的様式となっていたとみなされるのである。

同じ用法が、イスラエルのエジプト脱出に神が参与したことを記した箇所、「彼はその大いなる力をもって、その顔においてあなたを導き出した」(申 4:37) という句に使われている。「その顔において」(b'phānāw) と訳した語は、日本聖書協会訳と七十人訳では「自ら」と訳されている。この「顔」は神の臨在を意味しており、民をエジプトから救い出さんとする神の人格的な参与を表している。神は人格として民に臨むことによって民を動かし、民を救う。それゆえ「その顔において」と直訳せずに「その人格的臨在によって」とか「その人格的参与によって」と意識することもできる。

この用法がさらにより力動的に使われているのは、「使者や天使ではなく、彼の顔が彼らを救った」(イザ 63:9) という句においてである。⁽³⁰⁾ そこではイスラエルの救済が神の「顔」に直接結びつけられており、エジプトからの民の解放は神の「顔」によって引き起こされたと言われている。このイザヤ書 63:8-14 全体は救済史的回顧の表現となっており、民の解放のさいに神の人格的関与があったことが謳われている。yāša' (救った) の使役形 (ヒフイール) が神の積極的な関与を表しており、「神の顔」によって神の顕現あるいは臨在が意味されている。「顔」は天使と対立させられており、天使ではなく神自身の行為が強調されている。「顔」の語は神の行為が人格的であることを明らかにするために用いられた。

これまで見てきたように、パニームには現代語の再帰代名詞に相当する用法がある。ヘブル語には再帰代名詞「自身」との等値語はないが、パニームがその代用的役割を果す。現代語の語法と異なる点は、ヘブル語の「自身」には「人格として」「人格的に」という意味が含まれていることで

ある。

旧約聖書には「顔」を目的語にしたかすかずの言い廻しがあり、神と人の関係、人と人の関係の比喩的表現となっている。とりわけそれは神人関係の表現として生彩を放っており、神と人の関係が徹頭徹尾人格的であることを表している。(一)「顔を向ける」、(二)「顔を隠す」、(三)「顔をそらす」「顔を見せない」「顔を遠ざける」「顔を落す」、(四)「顔を上げる」「顔を輝かす」という成句が、いかに神と人の人格関係を力動的に表現しているかを概観してみよう。

(一)「向ける」を意味する *nāthan* と *śim* の二つの動詞を用いた「顔を向ける」という成句がある。「神が顔を向ける」ことは断罪を意味し、エルサレムの民への断罪(エゼ 15:6-7)、異教の偶像崇拝に従う者への断罪(レビ 20:3)を神が宣告する箇所はこの成句が使われている。異教の偶像を礼拝することはイスラエルの信仰集団からの逸脱であり、神との人格関係の外へ出ることを意味する。こうした偶像崇拝の徒に神が顔を向けると宣告することは神が審きの決意を示すことであるが、しかしこの断罪は民の根絶と同一ではない。エゼキエル書 14:8-11 の断罪の言葉には、神との交わりから迷い出た民が神に立ち返るなら、神は民を受け入れる、という神の意志が暗示されている。レビ記 26:14-45 は明らかに民を救いへ導くための威嚇と警告である。そこでは、イスラエルの民が神の戒めを守らず契約を破るなら、神は民に顔を向けるが、しかし民が自らと先祖の罪を告白するなら、神は民の先祖と結んだ契約を思い起こす、と言って神は民に悔悛を促している。

こうした勧告が救済の意を減じているのが、エレミヤ書である。律法と神の定めに従って歩まなかった民に向って神は言う、「見よ、私の顔をあなたがたに向ける。災を下すため、ユダの民をことごとく滅ぼすために」(44:11)。この神の言葉は民に決断を促すための呼びかけであるが、しか

しエゼキエルと異なりエレミヤの預言には、審きと罰の色合いが濃く浮き出ている。この引用句には *rā'a(h)* (災) という語があり、それがエレミヤ書における「顔を向ける」という成句の意味をより峻厳にしている。エレミヤはエゼキエルと違ってイスラエルの希望を高らかに謳わなかった。エレミヤ書では神が人に顔を向ける場合、主語の神が一人称であり、他の書では三人称であることが多い。それだけにエレミヤ書では、神と人の人格関係が強調されており、神の審きと罰の表現もそれだけ強烈になっている。⁽³¹⁾る。

また、動詞 *nāthan* を用いた「人が神に顔を向ける」という成句がある。神が人に顔を向けることは神人関係における否定面を表すが、人が神に顔を向けることはその肯定面、つまり人が積極的に神と関わろうとする意志を表す (ダニ 9:3; 歴下 20:3)。それは信仰者が人格と人格の関わりを神ともとうとする意志と決断の表現である。それゆえ、人が神に背を向けて顔を向けないことは、神に対する背信である (エレ 2:27。この箇所では「向ける」の意の動詞は *pānā(h)* が使われている)。

(二) *sāthar* の使役形 (ヒフイール) *histir* を用いた「顔を隠す」という成句がある。神が顔を向けることは審きと罰を意味するから、神が顔を隠すことはその反対であると考えられるかもしれない。「あなたの顔を私の罪から隠し、私のすべての咎を取り去ってください」(詩 51:11) という詩句では、罪の赦しを求めるために神の顔が隠されることが願われている、もはや罪が神によって見られないために。こうした例はあるが、しかし「神が顔を隠す」という言い廻しは、ほとんどの場合、否定的な意味で使われる。神が民に無関心でいること (詩 44:25)、神が人に考慮を払わず無視しつづけること (詩 13:2)、神が民に援助を与えないこと (申 32:20)、神が民を見棄て民から去ること (申 31:17)、さらに神が人の命の源を奪い取ること (詩 104:29) などが、「神が顔を隠す」という言い廻しによって語られている。詩篇 10:11 では、貧乏人から搾取する者がこの言

い廻しを使って、「神はいない」と嘯く。神が顔を隠すときは、神と人の人格関係が損なわれ、神の人格的臨在が遠ざかるときであるが、不信仰者はそれを喜ぶ。

そのため、詩篇では「あなたの顔を隠さないでください」(102:3)とか「いつまであなたの顔を私から隠すのですか」(13:2)という歎願や訴えが詩的語法になっている。顔を隠さないことは、神の好意的・肯定的な配慮なのである(22:25)。詩人は「わたしの方に向いてください (p'nē(h) 'ēlay)。あなたの顔をあなたの僕から隠さないでください」(69:17-18)と懇願する。「向く」と訳した動詞 pānā(h) は名詞パニームと同語源の語だが、(一)の「神が顔を向ける」(動詞は nāthan か śīm が使われる)という用法と異なり、神の審きではなく恵みを表現している。詩人は神との人格関係の恢復を希求しているのである。

しかし、神は顔を隠して悪しき者の祈りを聞こうとはしない(ミカ 3:4)。人間の罪が神の顔を隠すのである(イザ 59:2; エレ 33:5)。特にバビロン捕囚以後には、民の犯した罪ゆえに神が顔を隠し、イスラエルが敵の手に渡されたと考えられるようになった(エゼ 39:23)。しかし、神が顔を隠すことは最終的・決定的な契約の破棄を意味しない。神が顔を隠すことは民への警告であり、イスラエルが神を知るための神の導きなのである。将来、神の罰は解かれるという希望をエゼキエルは語る(39:28-29)。エルサレム陥落以後エゼキエルは捕囚の民を慰め、彼らに希望を宣べる預言者となった。イザヤはこうした希望をさらに力強く表現した。「私はヤコブの家からその顔を隠した主を待ち(hikithî)、彼を待ち望む(qiwwêthî)」(8:17)という句は、「神が顔を隠す」という言い廻しと「神を待ち望む」というヘブライズム特有の慣用表現が結びついて、簡潔で美しい信仰告白となっている。

(三) sābhabh の使役形(ヒフイール) hēsēbh を用いた「顔をそらす」という成句がある。神に対する背信の表現として、「神に背を向けて顔を

向けない」という言い廻しがあることはすでに述べた。これに似た言い廻しが、先祖が神を「見棄て、主の聖所から彼らの顔をそらし、うなじを向けた」(歴下 29:6) という句に使われている。顔をそらすこととうなじを向けることが信仰を棄てること、神からの離反を表している。両方とも対象に対する否定的な言い廻しになっている。

「私は私の顔を彼らからそらし、彼らは私の宝を汚す」(エゼ 7:22) という句では、異国の者がエルサレムの神殿を掠奪することが警告されている。神が異国の者から顔をそらすということは、彼らに対する罰を意味せず、神がイスラエルの神殿を見棄てることを表す。この場合、神の「顔」は神が「見ること」ではなく、神の「人格」を表示している。

「背を向けて顔を向けない」「うなじを向けて顔をそらす」という言い廻しのほかに、「背を見せて顔を見せない」という言い廻しがある。「彼らの滅びの日には、私は彼らに背を見せるが、顔を見せない⁽³²⁾」(エレ 18:17) という句では、神が民に顔を見せないことは審きを表し、逆に顔を見せることは好意や慈悲深い態度であることを暗示している。

神の審きを表す言い廻しにはほかに、sûr の使役形 (ヒフイール) hēsîr を用いた「顔を……から遠ざける」という成句がある。「なぜなら、あなたがたの神、主は恵み深く、憐れみ深いから。あなたがたが彼に立ち返るなら、顔をあなたがたから遠ざけないでしょう」(歴下 30:9) という句でも、神の顔は神の全人格の比喩となっている。

nāphal の使役形 (ヒフイール) hipîl を用いた「顔を落す」という成句がある。「私はあなたがたに私の顔を落さない⁽³³⁾。私は慈悲深いからである」(エレ 3:12) という句では、神が罰を控え恵みを与えることが宣べられている。ここでは、「顔を落す」ことは断罪の表現とされている。

(四) いわゆる「アロンの祝福」として知られ、後期ユダヤ教の祭儀において祭司が民を祝福するさいに用いられた定式文が、祭司資料の民数記 6:24-26 に残されている。⁽³⁴⁾「祝福」(brākhā(h)) は外面的な利益を与え

ることではなく、神と人が人格的な関わりをもつことを可能にし、人が飲むのうちにそれを受けとめることができるようにすることである。このアロンの祝福のなかに「主がその顔をあなたに向って上げますように」(26)という句がある。日本聖書協会訳では「願わくは主が御顔をあなたに向けるように」と訳されている。しかし、「神が顔を向ける」という言い廻しは断罪を意味するのであり、その場合動詞は *nāthan* か *śim* が使われる。ここでは、「上げる」の意である *nāśā'* が用いられている。「顔を上げる」という成句は一般に好意を表し、この引用句では祝福や恵みの表現となっている。人がこの言い廻しの主語になると、人の「顔」は神と対峙する人格の比喩となる。あなたが神に立ち返るなら、「あなたは神に向ってあなたの顔を上げるであろう」(ヨブ 22:26)、とヨブに意見する友人は言う。ここでは、神と人格的な関わりをもつことが推奨されている。また、この言い廻しは否定的な意味として、不公平や依怙^{いこ}臆^{おそ}の表現ともなり、「かたより見る」「分け隔てる」などと訳される(申 10:17; ヨブ 32:21; 34:19; 箴 18:5; レビ 19:15)。

アロンの祝福のなかに「主がその顔をあなたに向って輝かせますように」(25)という句がある。民は神が顔を輝かせて恵みを与えてくれることを希求する。そのため、「神が顔を輝かせる」(*hē'ir yhwh pānāw*)という言い廻しは神への懇願の詩的様式となった(詩 67:2; 80:4)。「あなたの顔をあなたの僕^{しもべ}のう上に輝かせ、あなたの慈しみをもって私をお救いください」(詩 31:17)という詩句は、神が顔を輝かせることが祝福であると同時に救いでもあることを示している。

また、「神の顔の光」という表現があり、それは人の心に信頼の念を起こさせる神の好意を意味する(詩 4:7; 89:16)。この表現は人間の顔の描写に影響を与え、王の恵み(箴 16:15)、人の好意(ヨブ 29:24)、人の英知(伝 8:1)の表現に転用された。

神を見ることはできないという思想は、旧約聖書に一貫している。こうした思想は神への畏れと結びついている。古代ヘブル人は神や天使を見た者は死ぬと考えていた(士6:22; 13:22)。こうした畏れは、神の顕現のさいに人が顔を隠すという動作に現われている(出エ3:6; 列上19:13)。

出エジプト記33:12-23は、神を見ることはできないという畏れと、それでも神を見たいという人間の根源的な願望の相剋を、ユーモラスに美しく表現した箇所である。モーセは神に与えられた恵みの保証を求め、神の栄光を見せてくれるよう神に懇願する。神はおのれのすべての善をモーセの「顔の前に」(19) 通らせることをモーセに約束するが、しかし「あなたは私の顔を見ることはできない。人は私を見て生きてはいないからである」(20) と言う。そして、「あなたは私の背を見るであろうが、私の顔は見られないであろう」(23) と結ぶ。顔と背が対置される言い廻しは、すでに見てきた。この箇所で注目すべき点は、可視性と結びついた擬人的表現であり、神の顔を見ることはできないが神の背を見ることはできる、と言われていることである。神の顔を見ることはできないとは、人間が本質的に神の「現臨」に耐えられないという意味であろう。それでは、神の背は何を意味しているのだろうか。すべての神の善をモーセの顔の前に通らせるという言葉は暗示的である。神の背を見るという比喩的表現は、歴史のなかに働いている神の業を知り、全地に満ちている神の栄光を見、この世において神と人格関係をもち、神の指し示す方向へ神の後から付き随って行くことを表していると解釈できる(もちろん一つの解釈であるが)。この箇所では、背を見ることはモーセにだけ許された例外的な恵みとされているが、しかし20節の言葉には、誰も神の顔を見ることはできないが、誰でも神の背は見ることができる、ということが前提されている。つまり、人間は神の直接的な臨在に耐えられず、神と人間はそれほど異質であるが、神と人間は完全に断絶したままではなく、この世において人格的な関わりをもつことが許されている、という神認識がここにある。こうしたことが

ら、この箇所を神と人の人格関係の比喩と解することができる。

神の顔を見ることはできないが見たい、という願望は古代ヘブル人に根深い。そのため、「神の顔を見る」という言い廻しが詩的語法になった。

「いつ私は行って神の顔を見るのであろうか」(詩 42:3) という詩句は、問の形をとって神への渴望を表現している。しかし、強調点は神の顔を見ることにはない。「私は義のうちにいて、あなたの顔を見るでしょう」(詩 17:15) という詩句は、神の恵みを確信した信仰者の信仰表現である。詩人は神との関わりを日毎に保つことを主張し、「たえまなく彼の顔を求めよ」(105:4) と謳う。この詩句では、神の顔は神との人格関係としての信仰の比喩である。

神の顔を見たいという願いはこうした詩的語法を造り出し、さらに、驚いたことに、「神と人が顔と顔を合わせて」という成句を生み出した。この成句は“pānīm 'el-pānīm”と“pānīm b'pānīm”の二つの形がある(後者は申 5:4 のみ)。この成句もまた比喩として解釈されなければならないであろう。モーセは「主が顔と顔を合わせて知った」者であったと言われている(申 34:10)。「知った」(yādha')という動詞は、ここではある主体がある客体を認知する知的認識行為を意味せず、二者の親密な触れ合いを表している⁽⁸⁵⁾。しかし、この触れ合いが完全に直接的に行われたと考えてはならない。「顔と顔を合わせて」という比喩は、神とモーセ相互の信頼関係として理解されなければならない。「人がその友に語るように、主は顔と顔を合わせてモーセに語った」(出エ 33:11) という句も同様に解釈すべきである。

神とイスラエルの民の出会いが申命記 5:4 に描かれている。「山で火のなかから、主はあなたがたと顔と顔を合わせて語った」という句がそれである。ここでは、神と民の対峙が述べられているが、しかし「顔と顔を合わせて」と言われていても、神を眼で見える姿で見たと考えられているわけではない。神を見たのではなく、神との人格的対峙が知られたのであ

る。それゆえ、民は火を見、神の声を聞いたとされ、神の顔を見たという表現は避けられた。エゼキエル書 20：34-38 では、エジプトから荒野への脱出ではなく、「新しい出エジプト」のことが語られている。「私はあなたがたをもろもろの民の荒野へ連れ出し、そこで顔と顔を合わせてあなたがたを審く」(35) と神は宣告する。この新しい出エジプトは神とイスラエルの対峙として特徴づけられている。「顔と顔を合わせて審く」という表現は、神がイスラエルの歴史に深く参与していることと、イスラエルの民を断罪する神の強い意志とを表している。

創世記 32：23-33 では、「顔と顔を合わせて」という成句がこれまで引用したどの句よりも文学的な効果を上げて使われており、その意味が不透明なままで不思議な魅力をもっている。この箇所は、旧約聖書のなかでもとりわけ魅力のある古譚の一つ、ヤボクの渡しでの神とヤコブの闘いの説話である。この説話はイスラエルの名とペヌエルの地名の原因譚となっており、のちに族長伝承のなかに繰り込まれた。この闘いにおいて、ヤコブは超自然的な存在を具体的な形姿で捕え、その体験をあとで「私は顔と顔を合わせて神を見た」(31) と説明した。⁽³⁶⁾「見た」(rā'a(h)) という動詞は可視性よりも現象の現実性を強調しており、「顔と顔を合わせて」という成句は体験されたことの重要性和親近感を表現していると考えられる。ヤコブは神を直接に見たのではなく、謎の人物を通じてヤコブと関わっている神の存在を知ることができたのである、と解釈できる。しかし、ヤコブが組み討ちしたのは神や天使でないなら、なぜヤコブは「私は神を見たが、私の命は救われた」(31) と言ったのであろうか。神を見ることは死を意味するから、神を見ても死ななかった、というヤコブの驚きは、彼が神を眼で見たことを暗示していないであろうか。こうした意味の不透明なところが、この説話をイスラエルの宗教的熱情の湧き上がる泉とした。ヤコブが神からイスラエルの名を与えられたという記述によって、この説話はイスラエル共同体の原体験の表現となった。古代ヘブル人はその原体験

の意味を「顔と顔を合わせて神を見た」という簡潔な比喻によって汲み尽そうとしたのである。この表現は現代の抽象的言語に置き換えられない生命をもっている。

「顔と顔を合わせて」という成句は、もっぱら神と神に選ばれた者の関係を記述する場合に用いられる。その関係は神と人の特別な関係である。神との近接した対峙が人間にとって救いとなるか災となるかは、この成句だけからはわからない。この成句は、ヤコブやモーセの場合のように神の祝福と恵みを記念する表現となることもあり、また神の恐るべき審きの表現となることもある。

III

一般に七十人訳と呼ばれるギリシア語訳旧約聖書の語法が、新約聖書の語法に影響を与えたことは確かである。七十人訳では直訳が心掛けられており、しばしばヘブル語の成句がそのままギリシア語に移し換えられたために、古典ギリシア語になかった成句が多く造り出された。パニームの用法もそのうちに数えられる。ここでは、パニームの多様な用法に影響を受けた、新約聖書の *πρόσωπον* の用法のうち、わずかな例に触れることができるだけである。

「ひれ伏す」という成句が旧約聖書にある。神への畏敬や恐怖を伴う動作であるが、この成句 (*nāphal 'al pānāw*) を直訳すると「その顔の上に落ちる」となる。この成句は七十人訳や新約聖書で “*πίπτειν ἐπὶ πρόσωπον αὐτοῦ*” (その顔の上に落ちる) と逐語訳されている。「アブラムはひれ伏した」(創17:3) という句は、七十人訳では “*ἔπεσεν Αβραμ ἐπὶ πρόσωπον αὐτοῦ*” と訳されている。雲のなかから神の声が聞こえると、イエスの弟子たちが「ひれ伏した」(マタ17:6) という句の原文は、 “*ἔπεσαν ἐπὶ πρόσωπον αὐτῶν*”⁽³⁷⁾ であり、人称を別にすれば七十人訳の文と同一である。

「人を分け隔てる」というヘブル語の成句については、すでに述べた。

この成句の直訳は「顔を上げる」であるが、「上げる」を意味する *nāśā'* には「取る」という意味もあるので、「顔を取る」とも訳することができる。そのためだと思われるが、この成句は新約聖書で “*λαμβάνειν πρόσωπον*”⁽³⁸⁾ (顔を取る) と訳され、依怙最賈するという意味で使われている。

人が神に顔を向けるというヘブル語の語法は、信仰における主体的決意の表現である。また、顔を向ける対象が神ではなくこの世のものであっても、この動作はその人の意志と決意を表す。神がエゼキエルに「あなたの顔をイスラエルの山やまへ向けよ」(6:2) と命じるとき、神はエゼキエルに決断を迫っているのである。「顔を向ける」という言い廻しは七十人訳で “*στηρίζειν τὸ πρόσωπον*” と訳され、それが新約聖書に踏襲された。イエスは昇天の日が近づいたので、「エルサレムへ行こうとして、その顔を向けた」(ルカ 9:51) という句がある。ここでは、「顔を向ける」という言い廻しが、迷わずにエルサレムへ進んでゆくイエスの固い決意を表現している。「顔」はあることを決意する自由な主体の比喻であり、決意したのちは迷わずに全人格的に、選んだ道を歩んでゆく意志を表している。ルカは「顔を向ける」という言い廻しを用いることによって、イエスのエルサレム行きが救済史にとって重要であったことを強調した。共同訳は⁽³⁹⁾ 「エルサレムへ行く決心を固め」とだけ訳し、「顔を向けた」の句を省いている。大意だけを訳出して、旧新約聖書に一貫している語法と、それが表している思想を骨抜きにした。

旧約聖書には、神の断罪の表現として神の顔を目的語にしたいくつかの言い廻しがあるが、新約聖書には一箇所、七十人訳の詩句からの引用(詩 33:17 (マツラ 34:17) ⇒ 第一ペテ 3:12) があるだけである。また、終末のときに不信仰な者が「主の顔から」退けられると言われている箇所(第二テサ 1:9) も七十人訳のイザヤ書 2:19 からの引用である。神の顔そのものが怒りの比喻になっているのも一箇所(黙示 6:16) にすぎない。神の顔の肯定的な表現としては、神の顔に栄光が輝くと言われている箇所

(第二コリ 3:7-18) と、救いの成就のときに僕たちが仰ぎ見る神の顔について言われている箇所(黙示 22:3-4)が目につくだけである。旧約聖書に多く見られた神の顔の成句が、新約聖書においてはわずかしかな数えられないのは、神の顔が隠され遠ざけられたという新約当時の時代意識の反映であろうか。それとも、神の顔の比喻そのものが詩的力を失った証しであろうか。

こうした傾向のなかで、旧約聖書の「顔」の用法を継承し、さらにその比喩的意味を大きく広げた句がある。あたかも旧約聖書における「顔」の用法の詩的力をすべてその句のうちに昇華してしまったかのように、それ以後の聖書記者はもはやこうした純度の高い表現を生み出すことはできなかった。その句は、新約聖書のうちで最も美しい愛の讃歌と言われている、コリント人への第一の手紙第 13 章にある。この第 13 章で、パウロは饒舌に、しかし力強く愛について語っているが、その饒舌の頂点において、「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて見るであろう」(12・日聖協)と謳う。この凝縮された表現は創世記 32:31 のヤコブの言葉に遠く呼応している。パウロはもはや「顔と顔を合わせて神を見る」とは言わない(日聖協にある「見るであろう」は原文にない補訳)。「顔と顔を合わせて」(*πρόσωπον πρὸς πρόσωπον*) という言い廻しだけですべてを語っている。この三語にはキリスト教信仰におけるすべての希望が凝縮している。この力強い句の意味するものは、終末時における神と人の全き人格関係の恢復への希望であるが、こうした抽象化が何ものをも語りえないことは明らかであろう。パウロは蒼古の時代からの人間の願望に新しい意味を付与して、それをこの一見なにげない素朴な表現に結晶させた。旧約聖書における一つの成句にこれほどの意味と力が与えられた例は、ほかにないであろう。

結

今世紀の人格主義の思想は「人格」という語の意味を鮮明にした。こうした現代人格主義の先鞭をつけたのは、ヘブライズムの伝統を受け継いで自らの思想を展開したマルティン・ブーバーである。彼は自ら人格主義を標榜しなかったが、彼の思想は「人格」という語を活性化した。彼は旧約聖書に表された神人関係の有り様を人格関係の理想としたのである。今日、「人格」について語る場合、旧約聖書を無視することはできない。

聖書を繙くと、そこに生きている「顔」の比喩の力強さに打たれる。生きている比喩は抽象的概念の意味内容を豊かにし、概念は比喩を解釈する鍵となる。「顔」の比喩と「人格」概念は、こうした幸福な絆で結ばれている。

註

- (1) 小倉志祥「人格の意義」(日本倫理学会・金子武蔵編『人格』,理想社,1974所収), 202頁。
- (2) 勝部真長・長谷川敏平編『現代のエスプリ』第79号,至文堂,1974に覆刻収録された、『哲学字彙』,東京大学三学部印行,1881。
- (3) D.P. Simpson, Cassell's New Latin-English Dictionary, 5th ed., Cassell & Company Ltd, London, 1975, s.v. persona. 三嶋唯義『人格主義の思想』,紀伊国屋書店,1969, 62頁。
- (4) 野町啓「位格と人格」(前掲『人格』所収)にその経緯が整理されている。
- (5) 前掲論文, 66・69頁。
- (6) とは言っても,ラテン語ペルソナの語源がギリシア語にあると主張しているのではない。それについては,現在,ラテン語・ギリシア語・エトルリア語の三つの語源説が考えられているが,「仮面」を意味するエトルリア語 phersu (ペルス)に由来するとみなす説が最も有力らしい。野町の前掲論文と渡辺二郎「生ける全体としてのペルソナ」(『エピステーメー』1975年11月号,朝日出版社所収)を参照。
- (7) マタ 28:19 と第二コリ 13:13 のような暗示的な句はあるが,三位一体の概

念そのものは聖書に明白には表示されていない。“una substantia et tres personae”という表現は三世紀初頭のテルトゥリアヌスに始まる。この教義は、四世紀のニケーア公会議と第一回コンスタンチノーブル公会議で、アリウス派との衝突の結果、再確認された。

- (8) 右手については、たとえば出エ 15 : 6. またヘブル語 'aph は鼻と同時に怒りを意味する。
- (9) 十戒の一つ (出エ 20 : 4-5)。
- (10) E. Jenni, ed., Theologisches Handwörterbuch zum Alten Testament, Bd.II, Chr. Kaiser Verlag, München, 1976, S. 434.
- (11) J. Reindl, Das Angesicht Gottes im Sprachgebrauch des Alten Testaments, St. Benno-Verlag, Leipzig, 1970, S. 189.
- (12) A.R. Johnson, “Aspects of the Use of the Term pānim in the Old Testament,” in H.J. Fück, ed., Festschrift Otto Eissfeldt, 1947, S. 155.
- (13) エゼ 1 : 10 ; 歴上 12 : 8 ; 創 30 : 40.
- (14) 出エ 25 : 20 ; 37 : 9 ; 歴下 3 : 13 ; エゼ 10 : 14 ; イザ 6 : 2.
- (15) 箴 7 : 13 ; エゼ 2 : 4 ; 伝 8 : 1 ; ダニ 8 : 23 ; 歴上 12 : 8.
- (16) 歴下 32 : 21 ; エレ 51 : 51 ; イザ 29 : 22 ; エゼ 27 : 35 ; ヨエ 2 : 6 ; エレ 30 : 6 ; ネヘ 2 : 2 ; 創 40 : 7 ; ヨブ 16 : 16 ; 29 : 24 ; 箴 15 : 13.
- (17) 創 2 : 6 ; 1 : 2 ; ヨブ 26 : 9 ; エレ 1 : 13 ; 伝 10 : 10 ; エゼ 21 : 21 ; 40 : 44 ; 47 : 1.
- (18) サム下 10 : 9 ; 箴 27 : 23.
- (19) G. Kittel, ed., Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament, Bd. VI, W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1959, 1965, S. 774.
- (20) Ibid., a.a.O.; F. Brown, ed., A Hebrew and English Lexicon of the Old Testament, Clarendon Press, Oxford, 1907¹, 1976³, p. 816.
- (21) 同様の例として出エ 23 : 17 が挙げられる。
- (22) G. von Rad, Theologie des Alten Testament, Bd. I, Chr. Kaiser Verlag, München, 1957. 荒井章三訳『旧約聖書神字 I』, 日本基督教団出版局, 1980, 384・389頁。
- (23) 日本聖書協会口語訳聖書, 1955 (以下, 「日聖協」と略す)。
- (24) La Bible, Les Sociétés Bibliques, 1964.
- (25) A. Rahlfs, ed., Septuaginta, Bd. I & II, Württembergische Bibelanstalt, Stuttgart, 1935.
- (26) Revised Standard Version, 1952.

- (27) The New English Bible, Oxford Univ., 1970 (以下 NEB と略す).
- (28) フリーゼンは神と神の「顔」とは区別されていると考えている. C. Vriezen, *Theologie des Alten Testament in Grundzügen*, H. Veenman & Zonen Verlag, Wageningen, Holland, 1956. 木田献一訳『旧約聖書神字概説』, 日本基督教団出版局, 1969, 181頁.
- (29) Reindl, op. cit., S. 64.
- (30) この箇所のマソラ・テキストは乱れており, 意味の著しく異なる二通りの読み方が可能である. 子音テキストを訳すと「彼らのあらゆる苦難においていかなる苦難もなく, 彼の顔の天使が彼らを救った」となるが, これでは意味がわからない. 日聖協では「彼らのすべての悩みのとき, 主も悩まれて, その御前の使いをもって彼らを救い」と訳されているが, このように訳するためにはテキストを改変しなければならない. 七十人訳は9節の最初の二語を8節に繰り入れ, 残りを “οὐ πρέσβυς οὐδὲ ἄγγελος, ἀλλ’ αὐτὸς κύριος ἔσωσεν αὐτοὺς” と訳した. すなわち8節を「そして彼は彼らのすべての苦難からの救い主になった」とし, 9節を「使者や天使ではなく, 主自身が彼らを救った」と訳したのである. さらに問題のある点は, 子音テキストの「顔の天使」という表現が旧約聖書のテキストにおいてはほかに知られていないことである. 日聖協でも「その御前の使い」と訳されているが, この訳は好ましくない. 9節の最初の二語を8節に繰り入れ, 次を二語でなく三語まとめて一区切りにすると, 七十人訳のように意味が通る. NEB でも “and he became their deliverer in all their troubles. It was no envoy, no angel, but he himself that delivered them” と訳されている. ただしこの訳し方にも疑念がないわけではない. šār は元来「圧制者」「迫害者」の意であり, πρέσβυς (使者) と訳すことには無理があるからである. にもかかわらず多くの註解者は七十人訳の解釈を取り, その解釈によってこの箇所をよりよく理解できると考えている (以上の考察は Ibid., SS. 80-84 に負っている).
- (31) 小泉仰「エレミヤ書におけるパニームの用法」(慶應義塾大学言語文化研究所紀要第10号, 1978所収), 169-170頁.
- (32) 「私は彼らに見せる」と訳した子音テキストは “’r’m” であるが, マソラ・テキストは “’er’ēm” (カル未完了一人称単数) と指示し, 「私は彼らの背を見るが, 顔を見ない」と読ませている. 私は “’ar’ēm” (ヒファイール未完了一人称単数) と解釈する.
- (33) lō’ を否定詞とせず副詞と解釈するなら, 「まことに, 私はあなたがたに私の顔を落す」と訳することができる (小泉, 前掲論文, 149-150頁).

- (34) H. Ringgren, *Israelitische Religion*, W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart, 1963. 荒井章三訳『イスラエル宗教史』, 教文館, 1976, 238-239頁.
- (35) ヘブル語では元来, 「知る」ことは夫婦の性の交わりを意味する. この動詞は, 結婚についての比喩を用いるホセア書のなかに多く見られる. そこでは, 「知る」ということは啓示または契約締結による触れ合いを意味している. M. Buber, *Der Glaube der Propheten*, Manesse Verlag, Zürich, 1950, S. 165-166. 高橋虔訳『預言者の信仰Ⅱ』, みすず書房, 1968, 12-14頁参照.
- (36) 創32; 23-33全体をJ資料のみとする説と JE 両資料混合とする説が挙げられる. 後者の場合, 31節はE資料とされるが, 今ここでは資料問題には触れない.
- (37) 新約聖書にはほかに, マタ26: 39; 黙示7: 11; 11: 16; ルカ5: 12; 17: 16にこの成句がある.
- (38) ルカ20: 21; ガラ2: 6.
- (39) 『新約聖書共同訳』, 日本聖書協会, 1978.